

末摘花論

— 変貌問題をめぐって —

武原弘

末摘花巻から蓬生巻への、末摘花像のきわだった変貌について、今井源衛氏「末摘花の問題」(『日本文学』昭30・9)ほか、すでに多数の指摘がある。^(注1) また、その変貌の理由についても、「源氏物語においては主題の設定に随伴して人物造型がなされる」^(注2)との基本認識に依って解説した森一郎氏の末摘花論が示唆に富み、卓見とされている。

しかし、末摘花、蓬生両巻に「持続するもの」、「物語の不変部分」を読みとる藤井貞和氏説、^(注3)末摘花の変貌を「単に局面の相違によつて造型のしかたが異なる」という「単純」なことがらとみず、^(注4)もつと人間的、内的な変化として捉えなおそうとする野村精一氏説もなされており、注意される。

物語の本文叙述にたちもどつて、末摘花の人間像を再吟味し、そこからこの物語に固有でしかも必然の思想と方法を追求してみたい。まず、末摘花の変貌というとき、彼女の人間像のどこが、どのように変わったのかという点について、確認の要がありそうである。

末摘花論 — 変貌問題をめぐって —

彼女は、末摘花巻で、「かいひそめ、人うとうもてなし」(1) — 341)、さらに「ひとへに物づつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ人」(1) — 350) として登場する。立ち聞きによつて、源氏はようやく女に近づくが、源氏の歌にも会話にも、女は答えを返さない「沈黙の女」^{しじま}なのである。この異常な寡黙が、源氏の女に対する好奇心をいっそう募らせることにもなるが、この巻における末摘花の人間像を型どる重要な表象なのである。

ところが、周知のように、蓬生巻における末摘花は、俄然、多弁な女となり、侍女や叔母たちの俗悪に対抗し、自己を主張している。これは一見、人物像の重大な変化、矛盾とも受けとめられよう。が、前者における物語の焦点は、立ち聞きによつて増進する源氏の女に対する好奇心の行く方にあるのだから、女の正体を故意に曖昧とする一面があり、末摘花の寡黙はそのための必須条件ともなっている。また、男性とは文通さえ経験のない末摘花がはじめて源氏を相手とする対面の場に身を置く状況は、後者において馴れ親しい侍女や無教養で俗悪な叔母を相手に会話する場面とは同次元に読まれるべきでない。

場面や状況の変化に即応する人物像の若干の変容は、他の作品で
もしばしば見受けられ、末摘花に固有の問題とはならない。

両巻における末摘花像のもっとも大きな相異は、彼女の詠歌態度
にあるといわれる。末摘花巻において、源氏と頭中将は麿うように
して女に歌を贈るが、二人とも返歌を得なかった。ようやく対面で
きるようになって詠みかける源氏の歌に対しても、彼女自身の返歌
はなされず、侍女たちの代作によっている。二人だけの夜を過こし
た後朝でも、末摘花は

ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなる (1)―368

有様で、源氏の贈歌に答えられない。それでも、めずらしく自発的
に贈歌することもあったが、その古風な歌

からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつつのみ
(1)―372

は、源氏をして「あさましの口つきや」(1)―373)と、あきれさせ
ている。後の玉鬘巻でも、彼女は同趣向の歌を源氏に贈り、源氏は

古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかごとそ離れねな。(中
略)さらに一筋にまつはれて、今めきたる言の葉にゆるぎたま
はぬこそ、妬きことははたあれ。(3)―131―132

と、皮肉まじりの批評を施している。

一方、蓬生巻では、離別する侍従に自らすすんで贈歌し、貧窮の
極みに在って故父宮を慕い独詠歌をなす末摘花である。

亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ

(2)―335)

独詠歌でありながら、源氏を喚び出し、引き寄せ、彼の独詠歌を導

く機能を有する、貴重な詠出である。^(注5)「細流抄」の評注に、「ひた
ちの宮の歌は、平生聞こえざる様なるを、此歌はきはめておもしろ
くあはれなるは、時の感より出できぬる故と見えたり」とあるよう
に、末摘花にはめずらしい、真情あふれる秀歌となっている。源氏
に再会し、数年来の思いを歌に託して、

年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか
(2)―341)

と詠むのは、源氏の贈歌

藤波のうち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ
(同)

を受けて、男の冷淡を軽く恨む、みごとな切り返しとなっているの
で、歌を不得手とする彼女の詠とは思われないほどである。源氏
も、そのような末摘花の詠歌態度に接して

袖の香も、昔よりはねびまさりたまへるにや (同)

と感心しているので、ここに彼女の成長を読みとることもできる。^(注6)

ただし、末摘花巻における彼女が歌に關して無知無能であったと
見るのは誤りであろう。男との艶なる歌の贈答経験はなかったの
で、源氏に相対して当意即妙な返歌は無理として、源氏が通ひはじ
めてから、「けはひうちそよめき世づいたり。君もすこしたをやぎ
たまへる気もてつけ」(1)―376)、年頭の源氏の来訪の折には、源
氏の

今年だに声すこし聞かせたまへかし、待たるるものはさしおか
れて、御気色のあらまらむなむゆかしき (1)―378)

との語りかけに

さへづる春は (同)

との古歌の一節(古今集、春上、読人しらず、「百千鳥さへづる春は物ごとにあたまれども我ぞふりゆく」)で答えている。源氏の会話が古歌(拾遺集、春、素性法師「あらたまの年たちかへる朝より待たるものは鶯の声」)を踏まえたのに応じたものである。源氏の後姿を見送る女が醜婦では「見苦しのわざや」(同)と嘆くほかないが、古歌の贈答に支えられる後朝の別れは、この物語に登場する人物の資格を保証する。少くも、読者の側ではそのように受けとる用意はできた、と見てよい。

補足的に述べるが、前掲の末摘花歌「からころも……」について、源氏の批評は前述のごとく冷厳なものであるが、物語という虚構世界の枠を外してみても、この歌が当時の和歌史においてそれほど駄作であるのか、また、源氏の批評がそのまま物語作者紫式部のそれに合致するのかどうか、疑えなくもあるまい。ちなみに、これに対する源氏の返歌と並べて、末摘花側の女房たちの評として、

御歌も、これよりのは、ことわり聞こえてしたたかにこそあれ、御返りは、ただをかしき方にこそ。(11—376)

との叙述をみる。もとより、これもまた虚構世界内人物の詞であるため、これもただちに作者の評言と見ることはできないが、作者の本音がいずれにあるかは必ずしも自明的なわけでもあるまい。つまり、源氏の眼に映る末摘花像は、会話にも和歌にもおくれた朴念仁であるが、それがただちに作者の創造してゆく彼女の実像なのかどうかは留保されるべき問題ではないか。

このような問題を考察する際に、いまひとつ再吟味しておきたい

末摘花論 — 変貌問題をめぐって —

ことがある。末摘花巻において、あれほど露骨に、むしろ残酷なまでに女の醜い容姿をこまごまと描き写した作者が、逢生巻においてはにわかにも同情的になり、その醜貌についての描写をつとめて省筆する傾向にある。もちろん、完全省筆というわけにはいかないの

で、ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ、御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。(9—326)

と叙してはいるが、続く本文にくはしくは聞こえじ。いとほしう、ものいひさがなきやうなり。(同)

との草子地を付し、女の醜貌についての語りをやめる。両巻において、末摘花に対する作者の態度それ自体が変化してきていることを知ることができる。彼女の人物像の変化も、作者の創作態度、方法そのものの変化に由来すると考えることができよう。

二

末摘花巻のおもしろさは、好奇心旺盛な源氏の色好みが思いがけない醜女に到り着く、その「をこの物語」に求められるものである。もちろん、読者の笑いは末摘花の醜貌に向けられている。が、かつて野村精一氏の卓説にも指摘されたごとく、「ここで笑われているのは末摘花だけなのではない。こういう女と交渉した『名のみことごとし』い男(注)光源氏もまたそうなのである」ことも読みすべし。

私は、こうした物語の主題を表現しえた作者の物語方法に注目したい。

この巻で、源氏の立ち聞きから垣間見へとたかまる接近の方法の中で型どられる末摘花像が印象深い。ここで、源氏の耳目はただちに読者自身のそれでもある。源氏の視線でとらえられる末摘花像だけが、読者にとって末摘花という女性人物のすべてなのである。この巻において、末摘花を「正身」という叙述で描写する例が多いのもそのためである（通して4場面に用いられている）。また、地の文において、

かしこには、文をだにといとほしく思し出でて、夕つ方ぞありける。(1)―359

かしこには、待つほど過ぎて、命婦も、いといとほしき御さまかなと、心うく思ひけり。(同)

私はさりととも心長く見はててむと、思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。(1)―361

などの叙述を見るが、「かしこ」は、すべて末摘花方を指す語であることを見ても、作者がどれほど源氏中心の視点法によりかかって物語を進めているかが明瞭である。

作中人物との間に距離をもち、作者が作中世界を対象化すればするほど、それが虚構化の度を増し加えるのに成功するであろうことは疑いない。そして、それは笑いの対象としての末摘花造型の方法として、作者にとって必要かつ十分のものであったことも確実であ

る。

しかし、この物語の作者は、源氏の視線にさらされて笑いとされた末摘花像の造型でのみ虚構の世界を完結させようとは考えてはいなかった。末摘花巻巻末の草子地「かかる人々の末々いかなりけむ」(1)―380が、そのことを証する。

末摘花巻における源氏と末摘花との交渉の後日譚を語る蓬生巻の方法は、まさに半回転の対照を示す。ここでの主人公は、もはや源氏ではなく末摘花自身である。この巻で用いられる「この」「ここ」などの近称指示語は、一貫して末摘花に当てられ、逆に、たとえ

かの殿には、めづらし人に、いとどの騒がしき御ありさまにて、(2)―333

のように、源氏を「かの」と遠称で指示している。さらに、ここには、いとどながめまざるころにて、つくづくとおはしけるに(2)―335

とあるように、「ここ」(末摘花)の内面世界に入って、作者は彼女の心情を精細に描写しはじめる。前掲の独詠歌も、末摘花に密着した作者の肉声という感があり、その歌に続く地の文は

も心苦しきほどになむありける。(2)―335

とあって、歌に直接する草子地文と見ることが出来る。この物語において、歌が作中人物の肉声として、あるいは「魂の表白の具」として、「散文的な語り」の断念と呼応しながらせり出してくる(注8)とす鈴木日出男氏の指摘が正しいことを確認したうえで、歌に直接する草子地は人物と作者の一体化を示すものと解釈することができる。

このような叙述形態は、限定視点の方法によって末摘花を外側から描写する末摘花巻では例を見ないものである。今井源衛氏が「蓬生巻では、全体が末摘花巻の描写的であったのに比べて、説明的な傾向が強い」と説くのも、こうした文体の変化を指してのことであろう。

三

末摘花を主人公の位置にすえなおし、源氏の視線のとどこかない彼女の内面世界に深く入り込んで、その心情を内側から精細に表現しようとする蓬生巻の方法は、さきの末摘花巻における笑いの世界を逆射照する。ここでの末摘花は、たしかに笑いの対象として存在するのではなく、むしろ悲劇のヒロインとして、あたかも別人に変貌したかに見える。しばしば論ぜられるように、両巻では物語の主題が異っているのである。源氏をはじめ、諸人物における情況の変化も作用しているであろう。

ただ、それは単純に末摘花像の変貌の問題に収束せられるべきこととがらではないように、私には考えられる。物語の表層において、末摘花の変貌は否みようなない事実として、それを虚構化する作者の方法は、蓬生巻の主題や構造の基底部に深くかかわって、複雑微妙である。

蓬生巻のクライマックスは、いうまでもなく、離別して十年余を経過した源氏と末摘花との再会場面である。独詠歌、唱和歌四首を配しての場面構成は、作者にとつても最重要の描写写象であったのであろう。が、そこに至る前半部の物語にこそ末摘花造型の主力が

注がれているのではないか。

作者は、そこにおいて、源氏の須磨退居以後の末摘花邸の極度の荒廃ぶりを精叙する。貧窮の極みにあつて、泣きながらもなお故父親王の遺言を墨守し、志操を高く堅持して堪える末摘花の生きざまは、確かで全きリアリティをもつ。生活のために家具調度を売れとの侍女たちの提言に對し、

見よと思ひたまひてこそ、しおかせたまひぬ。(中略) 亡き

人の御本意違はむがあらはれなること。(2)―319)

と断固拒絶し、「親のもてかしづきたまひし御心おきてのままに」(2)―321)、古風な生き方を変えない。それは、高貴の出自を誇る強がりとも見えるが、金広川勝美氏が説くように、「末摘花の存在の根源たる古代」への「金回帰」を語ろうとする作者の用意でもあろう。

さらに、これに続く場面では、「この姫君の母北の方のはらから」なる人物が新たに登場する。この叔母は、格式高い家に生まれながら、落ちぶれて一受領の妻となつていたのであるが、いまは時勢の浪に乗って成り上がり、窮迫した末摘花を侮蔑の目で見下している。年来受けた屈辱の恨みを晴らすべく、この叔母は悪意に満ちた挑戦によって末摘花への復讐をしかけてくる。姫宮を自分の娘たちの侍女にしようともちかけ、太宰の大式に任せられた夫に従つて下向するにつけては、姫宮に筑紫への同行を迫る。

打算的で俗悪な叔母の人物は、對する末摘花の操守古風な人格と対照せられていて、生き生きとした人物形象たりえているのが注目される。この人物が、功利と無節操に毒されて浮薄につきやすかつた当時の貴族社会の、もうひとつの現実を投射するための媒体であ

ることは確実として、この物語において彼女の果す役割にはいつその注意が必要である。彼女にとっては、この期に及んでもなおお皇統の品位を守ろうとする末摘花の態度が妬ましくもあり、羨ましくもあつたのであろう。そうした心情が怨恨に昂じ、復讐心にまで転生するのであるが、姫君への侮蔑のことは

あな憎。ことごとしや。心ひとつに思しあがるとも、さる敷原に年経たまふ人を、大将殿もやむごとなくしも思ひきこえたまはじ。(2)―324)

は、孤独にうちひしがれている末摘花の胸中に源氏への思慕の情をよびますことになる。叔母は重ねて言う。

まさにかくたつきなく、人わろき御ありさまを、数まへたまふ人はありなむや。(以下略) (2)―325)

末摘花は心の中に念じている。

さりとも、あり経ても思し出づるついであらじやは。あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身はうくて、かく忘れられたるにこそあれ、風のつてにても、わがかくいみじきありさまを聞きつけたまはば、必ずとぶらひ出でたまひてん。(2)―326)

源氏に対する心長い期待と信愛である。だがしかし、季節は冬に移り変わるに至っても、源氏の訪れはついにない。兄の禪師の話によれば、権大納言に昇進した源氏は、「仏菩薩の變化」(2)―327)と思われる偉大さで、帰京後の繁栄を誇っているという。零落の底にある女には、仏菩薩もないものか、女の真実は、所詮、男には通じないものか、と言いたげな作者なのである。「げに限りなめり」(同)と絶望の淵に沈む末摘花の苦悩に追いつちをかけるようにして、叔

母は侍女を連れ去って行く。

ストーリーの追跡は中止しよう。この条で読者に強く迫るのは、孤独と貧窮と侮蔑のさ中であつて、日々泣き暮らしながらもひたすらに源氏の来訪を待つ末摘花の姿である。それは、悲しいまでに純粹な、あわれなまでに一途な女の真情を訴え来るものなのである。

そのようにしてひたすらに「待つ」末摘花が、やがて「松」にかかる藤の花に誘われて蓬生のもとを訪ね来る源氏と再会するに至つて、この物語の読者は深い安堵と喜びを味わうのであつて、『無名草子』も、そのような末摘花に「誰よりもめでたくぞ思ゆる」との評を与えているのである。

このように見てくれば、二人の再会場面までの末摘花の孤独な生活を描いた前半部が、伏線としてもいかに効果的な描写機能をもつかがわかるのであるが、私見によれば、それは伏線以上に重要な意義を担っているのではないかと考える。再会の場面は、むしろ、物語の収束部分ではないだろうか。

検するに、源氏が末摘花と再会する条には、やや不自然な描写が認められる。その少し前にさかのぼつて、そもそも末摘花の叔母なる人物の登場がいかに唐突である。さきにも触れたように、この叔母のことは末摘花の源氏に対する待望の心を喚び起こしたのであり、ひいては二人の再会を導き出す機縁ともなっている。物語において、叔母の果す役割はきわめて大きいとしないでならぬ。副人物とはいえ、そのように重要な役割を担う彼女が、末摘花巻では存在の片鱗さえも見せなかつたのは何故であろうか。しかも、突如として登場して重大な役割を演じながら、いちばやく物語

から姿を消す理由もいささか不審である。

あるいはまた、源氏が昔の忍び歩きを思い出しながら末摘花邸の傍を過ぎようとするのが「卯月」であるのも、かなりの程度に問題ををはらむ。源氏は、その時、花散里を訪れようと忍んで出かけた。

花散里巻から描かれはじめた二人の關係は、ほぼ夏に集中し、女には橋が結びつけられる。末摘花邸の松にかかる藤を見て、源氏が「橋にかはりてをかしければ」(2-334)と思うのは、初めて花散里を訪ねた折のことを思い出したからで、ここでは、それに代る藤の花も美しいと見たのである。その意味において、いまが夏であるのは当然であろう。が、末摘花自身は、季節にあわせていえば、冬の女である。^(注12)あるいは雪の女としてもよい。そして、景物としてふさわしいものは、雪のこぼれおちる松である。末摘花巻における作者の末摘花造型は、そのようであった。ここでも松は有用なものとして生かされている。源氏と末摘花の關係に、松は不可欠とする室伏信助氏の指摘は正しい。^(注13)が、藤はいま唐突である。本系の物語で、松は明石の御方に結びつけられる事情もあるので、ここで作者は変更やむをえなかつたのであろうか。

いずれにしても、こうした諸点を考慮すれば、源氏と末摘花との再会を描く蓬生巻の場面描写は、前末摘花巻を正確にひき継ぐものとは見なしがたい。だからこそ末摘花像の変貌が指摘される所以なのでもあるうが、それは蓬生巻前半部においてではなく、後半部において集中的に現象する問題である点に注意しておかなければならぬ。

といった、源氏と末摘花との再会場面を含めた蓬生巻後半部に

末摘花論 ― 変貌問題をめぐって ―

は、結末を急ぐにあまりの性急不用意な筆運びが目だつ。とくに、最終部で

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東院といふ所になむ、
後は渡したてまつりたまひける。(下略)(2-344)

という叙述には、そうした印象が強い。今井氏の説くように、「先行紫上系諸巻とのつじつまを合せるに忙しく、光源氏については、とくに筆が窮している」^(注14)のである。

物語作者は、明らかに巻の前半部に比重をかけている。前述の叔母の人物像はとくにリアルで、それと対抗して真摯に生きる末摘花の人物像もまた比例して印象深かった。彼女の生きざまを通して、作者が読者に訴えようと意図したものがあつたのである。その意味において、源氏との再会によつてもたらされる彼女の幸福などは、後日譚の後日譚として型どおりに付記されるだけで十分であつた。当時の物語では、主人公のハッピー・エンドは常套法であつたから、蓬生巻執筆にかかるときの作者の構想に、源氏との再会で幸福をつかむ末摘花物語の結末部は一応予定されてはいたであらう。が、それは既述のごとくに型どおりのもので、つじつま合わせの感が強く、作者の主題意識はむしろ、そこに至るまでのプロセスの方に集中しているのである。

すでに、稻賀敬二氏などによる指摘もあるように、蓬生巻は、おそらく、物語本系の少女巻成立頃の別系追記のひとつとして書かれたものであることが明らかである。^(注15)それまでに、すでにさまざまの女性人物にかかわりながら、この物語の作者はそれを單純に外側から造型するにとどまる旧来の物語方法を超越し、その内界における

女性としての、あるいは人間としての生の深みに刻まれる苦惱や悲しみを、実人生のそれとして直視する写実の眼に所有しなおそうとしていた。そうした人間認識と追求の方法が深化するのは、私見によれば、源氏とのかかわりの中で内面的苦悩を深める明石の君造型が本格化する松風巻、薄雲巻を経てからのことであろうと推測したい。さらに、玉鬘物語の構想が併行する少女巻、玉鬘巻あたりに至って、雨夜の品定め以降源氏と関係のあった中の品の女性たちのその後の動向が思い出され、後日譚として蓬生巻、閑屋巻の執筆がはじめられたと想像することができる。が、末摘花巻で源氏にも読者にも笑いにされた女が、その内面においていかに思量し、いかに苦悩したかを凝視する作者にとつて、蓬生巻は単純な後日譚ではすまされない重さを担いはじめていたのであって、その意味において、この巻において末摘花造型にかける作者の主題と方法は、末摘花巻におけるそれとは比較にならない進歩を示すものなのである。

私がつくに注目したいのは、末摘花の内界にまで深く入って、その思量や心情を精緻する蓬生巻前半部が、源氏の視界とは遠く離れた場面情況として設定されている点である。端的にいえば、作者は源氏の知らない末摘花の世界を読者に提示したことになる。局面の転換といえはそれまでであろうが、ここには質量ともに深く重い末摘花の世界があつて、この物語におけるひとつの達成を果しているのであるから、このような方法の変化はそれほど単純なものではないであらう。

次節で、この点に関する卑見を述べて、この小論のまとめをした

四

さきにも触れたように、源氏と末摘花の再会は、彼の花散里訪問の忍び歩きの途次での偶然事であつた。荒廢した邸の古色蒼然たる庭の傍を過ぎようとして、源氏は

見し心地する木立かな、と思すは、はやうこの宮なりけり。

(2)―334

と驚く。ここでの「なりけり」は、地の文ながらも、源氏の視点から彼の発見の感動を叙したものである。惟光に確かめさせ、源氏は歌を口ずさみながら、蓬の露を分けて邸内に入る。

たづねてもわれこそとはめ道もなく深きよもぎのものこのころ

を (2)―338

粗末ながらも昔あつた中門が、いまは倒壊して跡形もない。やがて、源氏は姫君と対面する。すすけた几帳のかけで寡黙がちな女は昔のままだが、その衣裳の香ばしき、かすかながらもする応答は、わずかの変化を感じさせる。源氏は巧みな口説き文句を並べて、女を慰める。

年ごろの隔てにも、心ばかりは変らずなん、思ひやりきこえつるを、(中略) かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれもおろかならず、また変らぬ心ならひに、人の御心の中もたどり知らずなすら、分け入りはべりつる露けきなどを、(下略)

(2)―339―340

これが実意に欠ける社交辞令であることは、すでに読者に気づかれているので、作者は、

さしも思されぬことも、情々しう聞こえなしたまふことどもあ
んめり。(2-340)

との草子地で、弁解めいた付記を施す。

しかし、邸内の目に余る窮状は、源氏をして「松の木高くなり
ける年月のほどもあはれに」(同)に思わしめ、「藤波の……」の歌
(前掲)に託して、女の長年変わらぬ源氏への信頼と思慕に応え、
また、

年経たまへらむ、春秋の暮らしがたきなども、誰にかは愁へた
まはむ(2-341)

と、深い同情を寄せると、女も「年をへて……」の歌(前掲)で、
婉曲に待つ恋の切情を表白する。ここで二人の和歌の唱和が成り立
ち、心情こまやかにかよいあう再会の場面が完成されるが、いまに
して源氏は末摘花の内面をはじめ知り、

同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。(中略)年ごろさま
さまのもの思ひにほればれしくて隔てつるほど、つらしと思は
れつらむと、いとほしく思す。(2-342)

というように、長い間末摘花を忘却してしまっていた自己の非を反
省するのである。以後、源氏は、末摘花を手厚く保護し、やがては
二条東院へ迎えとる計画をすすめていくことは、前節でも触れた。

この再会の場面は、長年にわたって見捨てられていた末摘花が源
氏に再び発見され、貧窮と孤絶の中で守りつづけた源氏への信愛の
心を認められて幸福を得るところに物語の主旨が求められるのであ
るが、注意されるのは、源氏が末摘花を再発見し接近する場面構造
でありながら、その実、源氏が客体とされ、末摘花(あるいは彼女

末摘花論 — 変貌問題をめぐって —

の側に立場を転換した作者)に見られている情況をも作り出す、そ
の手法の精妙さである。たとえば、再会場面の発端部は末摘花の独
詠歌が先行し、あたかもそれに唱和するかのごとくに源氏の独詠歌
が導き出されている。末摘花の歌に喚び出されるように源氏は彼女
に近づき、再会する。そこに、故父親王の魂が揺動するのは暗示的
であるが、いまは詳考しない。また、惟光が末摘花邸に進入する場
面描写は、邸内の老女房の視点によって展開する。そこでの惟光は
「狐などの変化にや」(2-336)と見られ、その場の源氏もまた、
末摘花について「変らぬありさまならば、げにさこそはあらめと推
しはからるる人さまになむ」(2-337)と想像しながら躊躇してい
るのも妙で、読者にとって末摘花の変らぬ誠実の心は既知のもので
あるから、源氏もいささか「をこ」な男に見えてくる。さらに、源
氏との対面に際し不本意ながら叔母の残した衣裳を身につけている
末摘花の袖の香を、「昔よりはねびまさりたまへるにや」(2-341)
と受けとめるのも、源氏の誤解にほかならないことを、読者は知り
つくしている。

末摘花側の視点に合わせて物語を辿っている読者に、そのように
源氏側の言動がいくぶんずれを生じて現前するのは、源氏を対象化
する作者の視点^すがそれほどまでの確かさを獲得してきていることを
証する。もとより、源氏が理想の好色者であることは、この物語に
おいてつねに不変である。この再会の場面もまた、究極において、
源氏の理想性を高めるためのものであることは必然である。が、そ
うした源氏の理想性を対象化し、相対化するだけの重い役割がいま
の末摘花に賦与されはじめてるのである。前掲の野村論文に説か

れるところの「笑われる源氏」像が、ここに至ってようやく明瞭なものとなるのである。

蓬生巻におけるこのような主題と方法とは、しかしながら、萌芽として生成しつつはあっても、いまだ十分に成熟してはいない。後半部におけるやや性急な、安易とも思われる物語の結末——しばしば評されるつじつま合わせ——が、そのことを明白に示唆している。

作者はおそらく、新たに構築された六条院での源氏の世界に意を用いていたものと想像されるが、そこでの末摘花は影の薄い、単なる一端役にしかすぎない。物語がさらに展開して、第二部における六条院世界の内部崩壊を語りはじめるころ、蓬生巻で末摘花に課せられていた大きな任務が、本系での主要な女性人物たちに確実にひき継がれたと考えてさしつかえないのではなからうか。

いと頭いたう、うるさくものうければ、いままともついであらむをりに、思ひ出でてなむ聞ゆべきとぞ。(2)―(345)

という蓬生巻末の草子地は、はやく末摘花物語の終焉を暗示していて、物語世界の大きな節目を思わしめていた。

主として、末摘花、蓬生両巻に描かれた末摘花物語は、成立問題をも包みこんで統一的な把握を困難なものにしているが、帚木巻の雨夜の品定めにおける馬頭の弁

今はただ品にもよらし、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえたになくは、ただひとへにもそのままやかに、静かなる心のおもひきならむよるべをぞ、つひの頼みどころにはおくべかりける。(1)―(141)

に仮託された作者の思想を核とし、伝承に多い「をこ」の物語に

姿を借りた、いかにもこの物語の作者にふさわしい慎重み深さで語られたところの、好色者光源氏へのはやい反問だったのである。末摘花像が変貌したかに見えるのは、両巻の方法のちがいでによるもので、そこに作者の創作技能と人間認識の進展をみたい。

注1 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連

関」(『源氏物語の方法』昭44、桜楓社刊所収)、大朝雄二「並び逢生をめぐって」(『源氏物語正篇の研究』昭50、桜楓社刊所収)、今西祐一郎「古代の人、末摘花」(『講座源氏物語の世界』第四集昭55、有斐閣刊所収)など。

注2 注1の森論文。

注3 藤井貞和「蓬生」(『国文学』昭49・9)

注4 野村精一「蓬生」(『別冊国文学源氏物語必携』昭53・12)

注5 注3藤井論文参照。

注6 源氏の誤解とすべきか。本稿四節参照。なお、石川徹「末摘花」(『源氏物語講座』第三巻、昭47、有精堂刊所収)

は、末摘花の成長を認めるも可としている。

注7 野村精一「源氏物語の人間像・Ⅱ 末摘花と近江君」(『源氏物語の創造』昭44、桜楓社刊所収)

注8 鈴木日出男「△語り▽のなかの△歌▽」(『日本文学』昭

56・5)

注9 今井源衛「末摘花の問題」(『日本文学』昭30・9)

注10 広川勝美「廢園の姫君」(『講座源氏物語の世界』第四集昭55、有斐閣刊所収)

注11 「二十日の月さし出づるほどに、いと木高き影とも木暗

く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしく匂ひて、女御の
けはひ、ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうた
げなり。」(②—148、花散里卷) 参照。

注12 林田孝和『源氏物語の発想』昭55、桜楓社刊の第二編第
一章。

注13 室伏信助「末摘花について」(『国語と国文学』昭31・6)

注14 注9今井論文。

注15 稻賀敬二「螢兵部卿一家の物語」(『源氏物語の研究』昭
42、笠間書院刊) 所収。

なお、テキストには『日本古典文学全集源氏物語』(小学館刊)
を用い、引用文の下にその巻数と頁数とを記した。